ている。これには、書家として知られる日下部鳴鶴（東作）・巖谷一六が詩文を寄せている。

一九一一（明治44）年に還暦を迎え、多くの教え子らに祝ってもらった稼堂は、翌年佐久を離れ、子の源七（当時は長野県庁に勤務）が住む長野市へ転居した。明治から大正へと元号が変わったその年の一二月には、上水内郡組合立東部農学校（現長野吉田高校）の教授を嘱託されている。しかし、それから一年余り後の一九一四（大正3）年一月二一日に死去する。行年六十四歳であった。

佐久市甲にある稼堂の墓。正面に「稼堂喜信居士」と刻まれている。

## ●友人・教え子たち

稼堂の作品や関係文書は、依田昂家文書・依田房一家文書として伝えられている。それらを見ると、稼堂がもっとも親しく交際したのは並木梅源だったと思われる。梅源は、野沢の通称「やなば」の大地主で、一八八五（明治18）年に子の和一に家督を譲ってからは、漢詩や謡曲などの趣味に生きた人物だった。

依田家文書には、梅源の漢詩や書などが多数含まれている。ほかに貞祥寺中興の開山と称せられる鈴木頑石（正光）、長野県師範学校（現信州大学教育学部）を卒業し、岩村田町近在の小学校に勤務しながら文部省の中等学校教員試験検定（文検）に合格して国語・漢文科の免許をえた山室春蚓（茂次郎。別号藤城）らとも親しく交際した。山室は石版画家の岡村政子の弟で、文学者山室静の父にあたる。

一八八八（明治21）年には、そうした人々と漢詩集『嚶々吟社詩』を発行している。自ら漢詩を作るとともに、切磋琢磨しあっていたのである。

教え子には、並木梅源の子で、稼堂の有隣塾で学んだ後、松塘塾・旧制松本中学（現松本深志高校）で学び、長野県会議員、貴族院議員などを務めた和一がいる。並木家では、親子で稼堂と交わったことになる。

また、書家として大成する比田井天来（常太郎、鴻）もいる。天来は、稼堂を生涯師と仰ぎ、折あるごとに稼堂へ手紙を寄せている。それらも依田昂家文書に含まれている。ほかに医師・郡会議員として活躍した柳沢豊助（杏堂）、教師となり『百蟲詠』などの漢詩集を出版した臼田桜邨（壽惠吉）らもいる。

ところで、桜井村で開かれた有隣塾は、桜井村の青年たちが稼堂に頼んで自発的に開いた塾だった。その塾の規則（塾則）では、貧困で月謝などを払えない人には、月謝などを免除するとしている。地域の青年たちのともに学びたいという強い意欲がうかがえる。

稼堂は、自ら漢詩文を学ぶとともに、こうした勉強したいという強い意欲を持った少年・青年たちの希望に応じて、各地で漢詩文を教え、多数の有為な人材を育てたのである。

（斎藤洋一）

有隣塾の「入塾人名録」
冒頭に並木和一の名前がある。
（依田昂家文書）

**参考文献**

依田昂家文書・依田房一家文書（五郎兵衛記念館蔵）

佐久市教育委員会『五郎兵衛新田古文書目録　第八集』　佐久市教育委員会

佐久市志編纂委員会『佐久市志』佐久市志刊行会

## 佐久の先人たち㉓

# 塾を開いて漢詩文を教えた先生

# 依田稼堂

（1851～1914年）

東京で漢詩文を学んで帰った稼堂は、友人たちと学びあいながら、多数の漢詩文を作った。また佐久の野沢・岩村田・前山・桜井などで塾を開いて、１０００人を超す人々に漢詩文を教えた。

### ●漢詩文を学ぶ

依田稼堂は一八五一（嘉永４）年、佐久郡五郎兵衛新田村（現佐久市甲）に、依田源四郎・みねの子として生まれた。依田家は、裕福な農家で、父の源四郎は幕末には地域の「取締役」を務め、明治初期には「戸長」を務めた地域の有力者であった。稼堂は号で、名は喜信、通称は七太郎。順甫とも号した。

七太郎は、下県村（現佐久市下県）の木内芳軒から漢詩文を学んだ後、廃藩置県が行われた一八七一（明治４）年に上京し、浅草の鱸松塘塾で漢詩文を学んだ。鱸（本姓鈴木）松塘は、大沼沈山・小野湖山とともに「明治の三詩人」と称された人物で、佐久からは、野沢村（現佐久市野沢）の並木梅源（衛七）・和一父子も、松塘塾に学んでいる。稼堂は小野湖山とも親しく、その交流は終生続いた。稼堂は、当時一流の漢学者・漢詩人から漢詩文を学んだのである。

帰郷した稼堂は、一八七三（明治６）年に長野県講習所より「三等訓導仮免状」を与えられ、五郎兵衛新田村の右文学校に教員として勤務した。しかし、漢詩文をもっと学びたいという希望を強く持っていて、翌年に再び上京し、松塘塾の塾頭（塾長）となって勉強を続けた。

そして、一八七六（明治９）年には大谷元知と、藤田東湖・佐久間象山ら著名人二四人の文章を収録した『文章奇観』全三巻を編集・発行した。

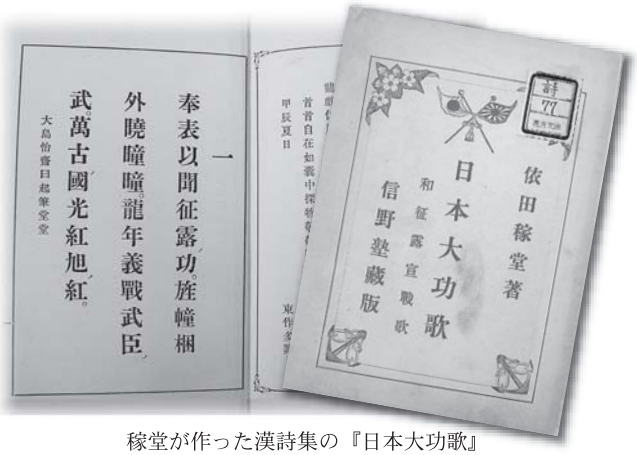
野沢の本覚寺
稼堂はここで有隣塾を開いた。

### ●塾を開いて

そのようにして滞在を続ける稼堂へ、父源四郎らから帰郷を促す手紙がたびたび寄せられた。その結果稼堂は、西南戦争が起こった一八七七（明治10）年に帰郷する。それから三年ほど、南北佐久郡の有志の招きに応じて各地で漢詩文を教えた後、一八八〇（明治13）年に野沢村で私塾・有隣塾を開いた。

その後稼堂は、一八九八（明治31）年に有隣塾を岩村田町（現佐久市岩村田）に移し、さらに前山村（現佐久市前山）・桜井村（現佐久市桜井）でも塾を開いて漢詩文を教えた。教え子は、南北佐久郡を中心に一〇〇〇人を超したといわれている。

なお、一九〇四（明治37）年には、日露戦争について詠んだ三〇首の漢詩を収めた『日本大功歌』を出版し



稼堂が作った漢詩集の『日本大功歌』
（上田市立図書館花月文庫蔵）